

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370445

研究課題名(和文) 句構造の形成と解釈における意味的選択、形態的選択および発話行為整合性の役割

研究課題名(英文) The Roles of Semantic Selection, Morphological Selection and Speech Act Compatibility in the Formation and Interpretation of Phrase Structure

研究代表者

齋藤 衛 (SAITO, Mamoru)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：70186964

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：統語論において追求されている極小主義では、統語構造派生のメカニズムとして、二つの要素から構成素を形成する併合のみを仮定する。従って、言語表現の適格性は、主に併合の適用および形態的・意味的選択により説明されなければならない。本研究では、まず、日本語におけるモーダル、補文標識、談話的小辞の階層性を、選択制限の帰結として導いた。次に、日本語では、文法格と述語屈折が、印欧系言語の一致と同様に、併合を可能にする役割を担うとの仮説を提示して、日本語の類型的特徴である多重格、自由語順、項省略、複合述語などに説明を与えた。この成果は、日本語分析と比較統語論における極小主義アプローチの有効性を示すものである。

研究成果の概要(英文)： In the minimalist approach to syntax, Merge, which takes two elements and forms a constituent, is assumed to be the sole mechanism for phrase structure building. Hence, grammatical phenomena must be explained in terms of selection, morphological and semantic, and the applicability of Merge. This project has successfully derived the hierarchical relations among modals, complementizers and speech act particles in Japanese from selectional restrictions. Then, it proposed that suffixal Case markers and predicate inflections make the application of Merge possible in Japanese, playing the role equivalent to agreement in Indo-European languages. This makes it possible to explain the typological properties of the language such as multiple occurrences of Case markers, free word order, argument ellipsis and extensive use of complex predicates. Overall, the achieved results indicate that the minimalist approach leads to significant insights in both Japanese grammar and comparative syntax.

研究分野：日本語を中心とした比較統語論に基づく統語理論研究

キーワード：極小主義アプローチ 比較統語論 パラメーター ラベリング 意味的選択 文法格 削除現象 スクラ  
ンプリング

## 1. 研究開始当初の背景

近年の統語論研究においてめざましい成果がみられる領域として、カートグラフィ研究と極小主義アプローチの探究をあげることができる。前者は、多様な言語の詳細な分析を通して、文上層部の階層構造を明らかにしてきた。また、後者は、二つの要素から構成素を形成する「併合」を唯一の句構造派生のメカニズムとして、人間言語の文法に余剰性が存在しない可能性を追求している。

日本語を対象とした研究においても、この二つの領域で成果が積み上げられてきた。カートグラフィ研究では、モーダルの分布に関する上田由紀子氏の研究、談話小辞(終助詞)に階層性があることを指摘した遠藤善雄氏の研究、補文標識の階層性をイタリア語、スペイン語との比較において論じた斎藤の研究などがある。また、極小主義アプローチに基づく日本語の分析も多く提示され、日本語文法に関する新たな知識が得られている。

同時に、日本語の分析に基づいて人間言語一般に関する洞察を深め、言語理論の発展に寄与する研究が充分になされてきたとは言いがたい。併合は二つの要素から自由に構成素を形成する操作であり、それ自体は特定の階層構造を予測しない。従って、カートグラフィ研究が提示する文上層部の階層構造が実際に存在するとすれば、それは説明されるべき現象として捉えられなければならない。日本語研究の次のステップとして、観察される階層構造の理由を探ることにより、人間言語の特性を明らかにしようとする研究をめざさなければならない。

また、極小主義アプローチに基づく日本語分析についても、日本語の主要な類型的特点を捉え、人間言語の可能な変異について具体的な提案をするに至ってはいない。個別現象の分析をふまつつも、そこに留まることなく、多重格文、自由語順、空項、複合述語の生産性といった日本語の性質に、極小主義アプローチの制限された枠組みの中で説明を与え、その統語理論に対する帰結を探る研究が求められている。

## 2. 研究の目的

日本語の分析を深め、極小主義アプローチに基づく比較統語論、統語理論研究を展開する。

(1) 日本語の文上層部において観察される階層構造を分析し、統語論、意味論に対する帰結を探る。

上田由紀子氏などの詳細な研究により、「だろう、まい」などのモーダルが一文中に共起しないことが知られている。英語においても、*must*, *will* のようなモーダルは共起せず、その理由として、モーダルが語彙的に時制を伴うことが指摘されている。しかし、日本語のモーダルは定義上時制を欠くことから、異なる説明が考えられなければならない。

遠藤善雄が指摘するように、談話的小辞は、

「～わよね」のように共起しうるが、その場合、階層性を反映する形で可能な順序に制限がある。例えば、「わ」が「よ、ね」に後続することはない。補文標識「の、か、と」についても、「～のかと」は可能であるが、この順序は固定されている。

本研究は、以上の階層構造に説明を与えることを第一の目的とする。極小主義アプローチを仮定する場合には、説明の可能性は極めて限定される。具体的には、それぞれの階層構造が、形態的選択、意味的選択、意味的整合性、談話的整合性の帰結として導かれなければならない。同時に、そのような説明が提示できれば、それは極小主義アプローチの有効性を示すことになる。

(2) 極小主義アプローチに基づいて、日本語文法の類型的特点に説明を与え、可能な言語間変異の理論に寄与することをめざす。

日本語は多重主語を許容し、例えば、久野暉氏の例文「文明国が男性が平均寿命が短い」は、言語学者の間で広く知られている。また、日本語では、構成素を自由に前置するスクランプリングが可能であり、結果として、「太郎がその本を買った～その本を太郎が買った」にみられるように、語順が固定されない。さらに、「殴り倒す、滑り落ちる」のような複合述語の多用と項省略も、日本語の特徴である。このような日本語の類型的特点については、1980年代に黒田成幸氏などが統率・束縛理論に基づく分析を試みているが、その後の統語理論の発展をふまえた研究はなされていない。

本研究は、 $\phi$ 素性一致の欠如を日本語の根本的な特徴とし、日本語文法格(格助詞)の与値と役割を見直すことから出発して、日本語の類型的特点に新たな説明を与えることを第二の目的とする。 $\phi$ 素性一致の欠如が空項を許容し、また、接辞文法格が句構造解釈において重要な役割を果たすが故に多重主語文やスクランプリングが可能になるという作業仮説を立て、これを精密化して、理論内に位置付ける。

## 3. 研究の方法

(1) 文構造上部の階層については、イタリア語、スペイン語など、ロマンス系言語の研究が最も進んでおり、Luigi Rizzi氏を始めとする当該言語の研究者の協力を得て、日本語の研究を進める。意味分析が完成した段階で、意味論や言語哲学に対する帰結が得られることが予測されることから、当該分野の専門家にも必要に応じて、協力をお願いする。

(2) 日本語の類型的特点の分析では、それぞれの現象において、異なる言語との詳細な比較から重要な示唆を得ることができると考えている。例えば、項省略現象は、トルコ語、中国語など、典型的に異なる言語でも観察されており、これらの言語にも適用しうる説明を追求する必要がある。研究協力者とともに、必要な言語比較を遂行する。

日本語の類型的特徴に関する研究は、より一般的な言語間変異の理論の構築をめざす研究の一部として位置付けられる。この点において、ゲルマン系言語、ロマンス系言語の分析を通して言語間変異の枠組みを探究する Ian Roberts 氏の研究や、スラヴ系言語の分析に基づいて理論の構築をめざす Zeljko Boskovic 氏の研究と理論的目標を共有する。両氏と密接に連絡を取り合い、必要に応じて集中的に討議しながら、理論研究を進める。

#### 4. 研究成果

(1) 文上層部の階層構造に関する研究成果は、図書[2]に収録された論文“Cartography and Selection: Case Studies in Japanese” (2015) にまとめ、さらにその帰結を追求した。

① まず、「よう、だろう、まい」などのモダルの共起制限を説明するために、モダルの要素一つ一つの選択制限を詳細に検討し、(i) 動詞語幹に接続する接辞であるが故に  $v$  を選択するものと (ii) 時制 (一般あるいは未来) を選択するものに大別されるとの結論を得た。ここから、モダル句を選択するモダルの要素がないため、同一文内にモダルの共起できないという事実が導かれる。

補文標識の階層性については、(i) 「の」が時制を選択し、命題文を形成すること、(ii) 「か」が命題文を補部として疑問文を形成すること、(iii) 「と」が直接引用に言い換えを埋め込む機能を有することを明らかにした。この分析によれば、「の<か<と」という階層のみならず、「のと」という連続が不可能であることも、補文標識の意味解釈の帰結として説明されることになる。

最後に、遠藤善雄氏による談話小辞の記述を見直し、「わ<よ<ね/な」という階層を得て、その理由を探った。「わ」は、時制を選択するため、談話小辞の中では、常に最下位に位置する。また、「よ」は主張、「ね/な」は反応を求める言語行為を表すことに基づき、談話小辞の階層に分析を与えた。

② 上記の分析が大枠において正しければ、階層構造は、極小主義アプローチが予測する通りに、選択制限、意味解釈、言語行為から導かれることになる。同時に、この分析は、選択制限の位置付け、補文の意味解釈、言語行為の分析を追求するにあたって、新たなデータを提供する。雑誌論文[2] “Notes on the Referential Transparency of Perception and Factive Verb Complements” では、補文の意味解釈に関する帰結を追求した。

英語補文の分析では、*that* 節が命題を表すと広く仮定されており、一方で、James Higginbotham 氏などが、知覚動詞や使役動詞の小節補部が事象を表すとしている。然るに、日本語では、*that* に対応する補文標識として、「と、の」を使い分ける。また、明確に、言動・思考動詞が「と」を選択し、「の」を主要部とする補文は事象として解釈される。この事実に基づいて、関連するデータを詳細に

検討し、(i) 言動・思考動詞の補文は直接引用の言い換えを表すとする Donald Davidson 氏の理論を支持する証拠が得られること、(ii) 補文の事象としての解釈は小節に限られず、時制節にも適用されること、(iii) *that* 節の解釈は一樣ではなく、統語分析にも多くの課題が残ることなどを示した。

③ 選択制限に関するさらなる研究としては、図書[4]に収録された論文“Selection and Incorporation in Complex Predicate Formation” (2014) がある。語彙的複合動詞(「押し倒す、泣き腫らす」など)が非対格動詞と他動詞/非能格動詞の組み合わせを許容しない(「\*押し倒れる、\*浮かび見る」など)ことが、影山太郎氏によって指摘されている。本論文では、まず、語彙的複合動詞が二つの動詞を統語的に併合することにより派生されることを論じ、影山氏の制約が  $v$  の選択制限から導かれることを示した。

次に異なる性質を示す中国語の結果複合動詞、エド語の結果連鎖動詞をとりあげ、日本語の語彙的複合動詞の分析にとって問題とはならないことを確認した。比較的自由的な動詞の組み合わせが可能な中国語、他動詞/非対格動詞と非対格動詞の組み合わせのみを許容するエド語の場合にも、 $v$  の選択制限が遵守されており、三言語間の相違は、複合動詞を日本語は統語的併合、中国語は顕在的編入、エド語は非顕在的編入によって形成することから導かれるとの結論を得た。

(2) 極小主義アプローチに基づく日本語の類型的特徴の分析については、図書[3]に収録された論文“Case and Labeling in a Language without  $\phi$ -feature Agreement” (2014) においてその概要を提示した。

① Noam Chomsky 氏は、併合によって形成された構成素のラベリングの必要性を論じる。例えば、動詞(句)と名詞(句)が併合された場合に、構成素が動詞句であるのか名詞句であるのかにより、解釈が異なる。ラベリングは、主要部と句が併合された場合には、主要部によってなされる。(例:  $\{V, NP\}=VP$ ) 他方、主要部と主要部、句と句の併合は基本的には、ラベルが決定できないため、許容されない。

しかし、同時に、Chomsky 氏は句と句が併合される場合があることを指摘し、それぞれのケースについて、どのようにラベリングがなされるかを提案する。その一つが、主語の名詞句と時制を主要部とする TP の併合である。氏の提案では、 $\phi$ 素性一致言語においては、主語と時制が  $\phi$ 素性を共有しており、この素性共有がラベリングを可能にする。

日本語の特徴の一つは、 $\phi$ 素性一致現象の欠如である。本研究では、まず、Chomsky 氏が提案する  $\phi$ 素性一致のメカニズムが、 $\phi$ 素性一致を欠く言語においてのみ、項省略が可能であることを予測することを指摘した。日本語分析において次に問題となるのは、 $\phi$ 素性の共有がないところで、主語の名詞句と TP

の併合によって形成された文のラベルがどのように決定されるかということである。この問題を論じつつ、日本語の接辞文法格と述語屈折(連用、連体、終止など)が、ラベリングにおいて要素を不可視化する機能を担うとの仮説を提示した。これにより、主語とTPの併合のみならず、多重主語、スクランプリング、語彙的複合動詞が説明される。

主語が二つ以上生起する場合、上位の主語は、下位の主語とTPを含む文と併合する。しかし、英語では、上位の主語は時制と $\phi$ 素性を共有せず、ラベリングがなし得ない。一方、日本語では、上位主語も接辞主格「が」を伴うため、ラベリングにおいて不可視的になり、TPがラベルを供給する。スクランプリングは、典型的には、目的語と文の併合である。これは、ラベリングが不可能であることから英語では排除されるが、日本語の場合には、目的語が接辞対格「を」を伴うため、ラベリングの問題が生じない。最後に、日本語の語彙的複合動詞が、二動詞の統語的併合により形成されることはすでに述べたが、これは主要部と主要部の併合であり、どのようにラベルが付されるかが問題となる。語彙的複合動詞では、必ず前の動詞が連用形で表れる。「滑り落ちる、押し倒す」本研究の分析は、この屈折が、後ろの動詞によるラベルの供給を可能にしているというものである。

Chomsky理論では、併合およびそれに伴うラベリングが、言語が必要とする最低限の文法であり、 $\phi$ 素性一致のように余剰的に見える現象もラベリングを可能にする機能を担う。本研究は、日本語のような言語では、 $\phi$ 素性一致に代わって、接辞文法格と述語屈折がラベリングを可能にし、そのことが日本語の類型的特徴の根源にあるとの結論に至った。

◎ 雑誌論文 [1] “(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without  $\phi$ -feature Agreement” (2016) では、文法格の与値メカニズムを精密化しつつ、日本語以外の言語に見られる項省略とVP削除など省略現象一般を考慮することにより、上記の分析を発展させた。

VP削除、N'削除、スルーシングと呼ばれる現象については、指定部に要素がある場合に、機能範疇の補部が省略されうるというSaito-Murasugi/Lobeckの一般化が知られている。本研究では、まず、省略された要素は、内部構造を有しないが故に主要部としてふるまうとするNorvin Richards氏の提案に基づいて、この一般化がラベリングの可否から導かれることを示した。この分析の帰結として、項省略の条件には、 $\phi$ 素性一致の欠如に加えて、接辞文法格があることになる。

さらに、以上の結論をふまえて、トルコ語、マラヤラム語、中国語の項省略現象を検討して、統語理論を発展させる試案を提示した。この三言語では、主語省略が観察されず、目的語省略のみが許容される。例えば、中国語

は、日本語のように $\phi$ 素性一致現象を欠くが、接辞文法格は有しない。この事実から、主語省略やスクランプリングがないことが正しく予測される一方で、目的語省略については説明しえない。このような事実に基づき、Noam Chomsky氏の $\phi$ 素性共有に基づくラベリングが、格素性の共有によるラベリングとして捉え直されるべき可能性を示唆した。この示唆が正しければ、接辞文法格を有する言語のみならず、すべての言語で文法格がラベリングを補助する役割を果たしていることになる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

[1] Saito, Mamoru. “(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without  $\phi$ -feature Agreement” (懲遡論文, 査読あり), *The Linguistic Review* 33 (Special issue on labels), 129-175, 2016.

[2] Saito, Mamoru. “Notes on the Referential Transparency of Perception and Factive Verb Complements” (査読なし), *Nanzan Linguistics* 10, 21-42, 2015.

[3] 齋藤 衛. 「日本語文法を特徴付けるパラメーター再考」(査読なし), 村杉恵子編『言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約: 領域指定型プロジェクト成果報告書 II』, 国立国語研究所/南山大学, 1-30, 2013.

[学会発表] (計8件)

[1] Saito, Mamoru. “Labeling by Case” (招待研究発表), 理論言語学国際検討会 Thirty Years of Linguistics at Tsing Hua, 2015年9月5日, 国立清華大学, 新竹(中華民国).

[2] 齋藤 衛. 「知覚動詞/叙実動詞補文の意味解釈—日本語統語構造からの考察」(招待講演), 関西言語学会第40回記念大会, 2015年6月14日, 神戸大学(兵庫県神戸市).

[3] Saito, Mamoru. “Case for Labeling: A Case Study in a Language without  $\phi$ -feature Agreement” (招待研究発表), *Cambridge Comparative Syntax 4: Rethinking Comparative Syntax*, 2015年5月9日, University of Cambridge, ケンブリッジ(グレートブリテン及び北アイルランド連合王国).

[4] Saito, Mamoru. “Report Phrases and Propositional Attitudes” (招待研究発表), *International Conference on Generative Linguistics and Philosophy*, 2014年6月28日, Goethe Universität Frankfurt am Main, フランクフルト(ドイツ連邦共和国).

[5] Saito, Mamoru. “Events and Attitude Reports: A Case Study with Clausal Complementation in Japanese” (基調講演), LILA '14: Linguistics and Language Conference, 2014年6月17日, イスタンブール(トルコ共和国).

[6] 齋藤 衛. “Labeling and Parametric Syntax: Some Preliminary Ideas,” 日本英語学会第 31 回大会ワークショップ, 2013 年 11 月 9 日, 福岡大学 (福岡県福岡市).

[7] Saito, Mamoru. “Remnant Movement and Chain Interpretation” (招待研究発表), Remnant Movement: An International Conference on Generative Syntax, 2013 年 6 月 21 日, Goethe Universität Frankfurt am Main, フランクフルト (ドイツ連邦共和国).

[8] Saito, Mamoru. “Notes on the  $\nu$ -V Selectional Relations with Complex Predicates” (招待研究発表), The 8th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics, 2013 年 6 月 5 日, 国立清華大学, 新竹 (中華民国).

[図書] (計 7 件)

[1] Grewendorf, Günther (編), Yuji Takano, Mamoru Saito 他 9 名. *Remnant Movement*, de Gruyter Mouton, 322pp. (担当部分: Remnant Movement, Radical Reconstruction, and Binding Relations, 221-256), 2015.

[2] Shlonsky, Ur (編), Adriana Belletti, Mamoru Saito 他 19 名. *Beyond Functional Sequence*, Oxford University Press, 357pp. (担当部分: Chapter 13. Cartography and Selection: Case Studies in Japanese, 255-274), 2015.

[3] Cardinaletti, Anna, Guglielmo Cinque, Yoshio Endo (編), Mamoru Saito 他 10 名. *On Peripheries*, ひつじ書房, 341pp. (担当部分: Case and Labeling in a Language without  $\phi$ -feature Agreement, 269-297), 2014.

[4] Li, Audrey, Andrew Simpson, Wei-Tien Dylan Tsai (編), Mamoru Saito 他 17 名. *Chinese Syntax in a Cross-Linguistic Perspective*, Oxford University Press, 446pp. (担当部分: Chapter 10. Selection and Incorporation in Complex Predicate Formation, 251-269), 2014.

[5] Saito, Mamoru (編), Keiko Murasugi, Daiko Takahashi 他 11 名. *Japanese Syntax in Comparative Perspective*, Oxford University Press, 352pp., 2014.

[6] 岸本秀樹, 由本陽子 (編), 齋藤 衛 他 17 名. 『複雑述語研究の現在』, ひつじ書房, 437pp. (担当部分: 複合動詞の形成と選択制限—他動性調和を手掛かりとして, 207-233), 2014.

[7] 池内正幸, 郷路拓也 (編), 齋藤 衛 他 8 名. 『生成言語研究の現在』, ひつじ書房, 263pp. (担当部分: 第 10 章 日本語埋め込み文の意味的・談話的性質—比較統語論への招待, 221-251), 2013.

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:

種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況 (計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

<http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/LINGUISTICS/staff/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

齋藤 衛 (SAITO, Mamoru)  
南山大学・人文学部・教授  
研究者番号: 70186964

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: